

沖縄県今帰仁村謝名の手踊りエイサー

小林 公 江

(教育学科教授)

小林 幸 男

(京都教育大学名誉教授)

はじめに

沖縄の盆の芸能であるエイサーには、大太鼓と締太鼓、あるいは半打鼓^{ぱーらんぐ}を打ちながら勇壮に踊るエイサー（太鼓エイサー）や手踊りを中心とするエイサー（手踊りエイサー）など、多様な形態がある。このうち太鼓エイサーは、戦後のエイサーコンクールを契機として、踊りや衣装に工夫を凝らして急速に発展し、エイサーが行われていなかった地域や手踊りエイサーの伝承地へも広がり続け、現在では沖縄だけでなく全国的に広がっている。こうした状況の一方で、古いエイサーの要素を残した手踊りエイサーは、今も読谷村や沖縄本島北部の名護市西部・本部町・今帰仁村^{な き じん せん}・大宜味村^{おおき み}・国頭村^{くにがみ}などで多数伝承されおり、その形態も、三味線伴奏で太鼓衆の踊りを交えたもの（読谷村）、三味線伴奏で太鼓衆の踊りを伴わないもの（名護市西部・本部町・今帰仁村）、太鼓伴奏で女性のみが行うもの（大宜味村・国頭村）と、多様である。

筆者らは1974年から古い要素を残す手踊りエイサーの調査に取り組み、伝承地におけるエイサーの状況を報告し、併せて楽譜・歌詞の資料化に取り組んできた。本稿はこの一環として、1996年～2004年に筆者が共同で行った調査に基づき今帰仁村謝名^{しやな}のエイサーについて報告し、歌詞・楽譜の資料作成を試みたものである。

1. 謝名エイサーの概観

謝名は、今帰仁村のほぼ中央に位置し、東側は玉城^{たましろ}、仲宗根^{なかつね}、西は平敷^{へしき}、崎山^{さきやま}、北は越地^{こえち}と、多くの集落に接している。人口は2008年9月末現在で538人で、今帰仁では中程度の規模の集

落である。

(1) 謝名エイサーについて

今帰仁村の伝統的なエイサーは、三線伴奏による男女あるいは男のみの円陣手踊りエイサーである。三線の演奏者（謝名では三線弾^{さんしん び}ちや、という）は本調子、一二揚（謝名では二揚^{にーあぎ}）という三線の調絃毎に十曲前後をほぼ同じ早間のテンポで休みなく連続して演奏する。この三線弾ちやが打ち出した歌を踊り手が囃しで締めくくることが一般的な歌の形である。

謝名エイサーもこの形で、戦前から旧盆の時期になると青年達が各家庭を廻って行っていた。しかし、1940, 41（昭和15, 6）年頃に娯楽的なものに許可が下りなくなったことから中断し、1947, 8（昭和22, 3）年頃に復活している。

1958（昭和33）年頃から15年あまりエイサーに参加していた我那覇隆正氏^{がなは}によれば、氏の時代には、旧暦7月16日の昼頃からあさぎを皮切りに、エイサー衆を招待した家や、あちこちの辻などでエイサーを踊り、年により今帰仁村の中心地である仲宗根のスーパーや北部製糖の工場までも出向いた。当時は青年も多く、2組に分かれて集落の西と東から廻ったこともあるという²。また、円陣を二重にすることもあり、その時は内側が女性、外側が男性で、互いに逆の方向に廻っていたとのことである³。

その後、多くの青年達が沖縄本島中南部で職を得て集落を離れるようになると、青年会はエイサー廻りをしなくなり、十数年前から公民館の庭に櫓を建てて、旧暦15日、16日の夜にエイサーを行うようになった⁴。15日は青年だけで行

うが、16日は区民が多数参加し、エイサーの合間に子供会や婦人会の踊り、花火なども行われる賑やかな催しとなっている。

謝名エイサーには特別な衣装はないが、現在では、1975（昭和50）年頃に青年会が中心になって購入した法被を着て、頭に鉢巻をするのが恒例である。法被以前は普段着のままで、鉢巻もなかったとのことである。

謝名にはエイサーの他に、区で伝承してきた古典舞踊や雑踊などを演じる豊年祭も伝承されている。これは五年廻る、すなわち4年に1度催されるもので、区最大の行事である。特設舞台の上で多数の舞踊が演じられ、沖縄県指定民俗文化財の「アヤチー獅子」（操り獅子）も出ることから、区外からも多くの人々が集まる。

こうした区全体の催しに比べると、エイサーへの取組みは青年会中心であるためやや小規模である。しかし、謝名エイサーは後述するように、今なお多数の曲を演じる数少ないエイサーである点で、その伝承は重要である。また、現在では、毎年行われる区民参加の盆の催しの核としての重要性も併せ持っている。

したがって、以前は2、3週間前から行われていた練習の日数が減り、壮年層の踊り手の参加が欠かせない状況にある謝名エイサーの今後のありようは非常に気にかかるところである。

(2) エイサー曲について

前述のように今帰仁村の伝統的なエイサーは、調絃毎に十曲前後が連続して演奏されるため、曲名は必ずしも明確ではない。本稿では、一般的な曲名あるいは歌い出しの歌詞や囃しことばを便宜的に曲名として用い、謝名エイサーの次第とレパートリをまとめておく。なお、エイサーは本調子、一二揚の順に行われる。

本調子

三線の前弾が始まると踊り手は手を打ちながら円陣を作る。円陣ができると前弾きの旋律が変わり、その後、歌と踊りが始まる。

《前囃し〜二合小》《テンヨー》
《今帰仁ぬ城》《伊舎堂》《念仏》《前田節》

《稲摺節》《三村節》《白保節》《健堅辺名地》
《海やかから》《スーリ東》……以上12曲

一二揚

調絃が終わって一二揚の前弾が始まると踊り手は手を叩きながら本調子とは逆廻りで円周上を歩く。その後歌と踊りが始まる。

《海ぬ釣法螺》《イルサースナー》
《カマヤシナー》《仲門ヘイ》《谷茶前》
《ダנק節》《十七八節》《ヨー加那ヨー》
《赤山》《ヨー愛シー》《サヨサー（世願節）》

《デンスナー》……以上12曲

カチャーシー 《加那ヨー》

以上が現行のエイサーの次第とレパートリである。曲は概ね記載の順序で歌い踊られるが、実況では10曲目の後で3曲目に戻るなど、曲を繰り返す場合もある。曲の途中や囃しの後では踊り手が「イヤササ」「アネサッサイ ハ ハ」などと掛声を掛け、指笛を鳴らすことも多く、歌や三線に合わせてリズムカルに鉦留めの太太鼓と締太鼓が一組で打たれるので、賑やかで活気がある。

謝名では実際に歌い踊る曲として24曲が伝承されているが、この曲数は今帰仁村の集落の現行の伝承曲数としてはかなり多い方である⁵。また、《ヨー愛シー》はエイサー曲としては謝名独特であり、他集落では縦列の踊り曲《サヨサー（世願節）》が謝名では円陣の曲であるなどの特徴もみられる。

謝名エイサーのレパートリを本部半島地域の同系のエイサーと比較すると、多くの曲がこの地域の標準的なものであるが、歌詞や旋律線、基本的な踊り方には今帰仁村独自の特徴がみられる。さらに、今帰仁村のレパートリという観点から検討すると、《念仏》や《ヨー加那ヨー》など村の西側のレパートリの数は少ない。一方、東側独特のレパートリは含まないものの歌詞には東側の要素もみられる。こうしたことから、地理的な位置と同様、謝名エイサーは今帰仁村東西の中間に位置すると考えられる。

2. 収集資料

今回の資料化には下記の録画、録音を用いた。

・録画……いずれもエイサーの実況

1. 1996年8月29日 謝名公民館庭

演唱：喜瀬繁男(1944年生) 他

2. 1997年8月19日 謝名公民館庭

演唱：喜瀬繁男 他

3. 2004年8月31日 謝名公民館庭

演唱：喜瀬繁男 他

録画機材：1,2 Sony DCR-FX1・ECM-959A

3 Sony DCR-HC1・ECM-HST1

録画担当：小林幸男（1・2は単独取材）

・録音

1. 2004年8月28日 米須清敬宅

米須清敬（1926年生）からの聞き取り

2. 2004年8月28日 我那覇隆正宅

我那覇隆正（1943年生）からの聞き取り

3. 2004年8月29日 謝名公民館

喜瀬繁男、湧川博和（1953年生）他からの歌詞についての聞き取り

4. 2004年8月31日 謝名公民館庭

エイサーの実況 演唱：喜瀬繁男 他

録音機材：Sony TCD-D8（DAT）・ECM-959A

録音担当：1～3 小林幸男, 4 小林公江

3. 謝名エイサーの歌詞

凡 例

- ・歌詞は、囃しや掛声を含め、楽譜と整合を図った上でゴシック体で示した。
- ・明朝体で共通語訳を付けた。訳は、地元の解釈を参考にしながら、直訳に近い形で小林幸男が行い、小林公江が校閲した。
- ・歌詞本体は外来語以外は漢字平仮名交じり表記、その他は総て漢字片仮名表記を基本とした。
- ・〈 〉 ……踊り手の歌唱部分を示す。
- 〔 〕 ……歌詞や囃しのヴァリエーションを示す。
- { } ……音数を合わせるための反復を示す。
- ・歌意などの注釈は、……の形で適宜示した。
- ・曲名は、筆者が一般的な曲名をつけて示した。
- ・歌詞の一部だけが歌われているものは、予想される残りの部分の訳を補った。

本 調 子

世願いさびら あんまーたい 〈スリ チントウンテン〉

鈍りてい鈍りてい 如何すがやー 〈スリ チントウンテン〉

豊年願いをしますよ、お母さん。〈ソレ チントンテン〉

だらだらして、だらだらしてどうするのかね。（元気を出していこう！）〈ソレ チントンテン〉

1. 《ニ合小》

此まぬはんし前や 肝持ちぬ良たさぬ 被てい巡やびら

〈サウエン サウエン サーサウエン ピラルラー ラーラルラー

ニ合ドーヤ ニ合ドーヤ 酒ニ合 一升ニ合 チェチェイ〉

一合やうたびみせーら 二合やうたびみそーり 被てい巡やびら 〈同前〉

一合や肩に重さぬ 二合やうたびみそーり 被てい巡やびら 〈同前〉

ここのお婆様は心持が宜しい。（酒を）頂戴して廻ります。〈サウエン～、ピーラルラー（哨唢の擬音）〉

一合をば下さいますか、（いや）二合をば賜りませ。（酒を）頂戴して廻りましょう。

一合は肩に重い。二合をば賜りませ。（酒を）頂戴して廻りましょう。

2. 《テンヨー》

東^{あづき}ん門^{かど}ぬ月^{つき}橋^{はし} 枝^{えだ}持^{もち}ちぬ清^{きよ}らさ

〈テンヨー テンヨー シタリクテン ササ ハーリヨーイヌ ユイヤナ〉

吾^わ達^{たち}女^め童^{どう}ぬ 胴^{どう}持^{もち}ち小^こぬ清^{きよ}らさ

〈テンヨー テンヨー シタリクテン ササ ハーリヨーイヌ ユイヤナ〉

東^{あづき}の門^{かど}の月^{つき}橋^{はし}（ミカン科の木）は、枝振りが美しい。

〈テンヨー テンヨー シタリコテン ササ ハーリヨーイノ ヨイヤナ〉

私^{わたし}達^{たち}娘^{むすめ}は、スタイルが美しい。〈テンヨー テンヨー シタリコテン ササ〜〉

3. 《今帰仁ぬ城》

今^{いま}帰^{かへ}仁^にぬ城^{しろ}ヨ^よンサ^ー 霜^{しも}成^{なり}ぬ九^く年^{ねん}母^{はは} 〈サー ヒヤヌガヘイ ササ ヒヤヌガヘイ〉

志^し慶^{けい}真^ま乙^お樽^{づん}が 貴^きちやい佩^{はい}ちやい 〈サー ヒヤヌガヘイ ササ ヒヤヌガヘイ〉

今帰仁の城（北山城），遅成りの蜜柑，〈サー ヒヤヌガヘイ（……威勢の掛声）ササ ヒヤヌガヘイ〉

志慶真村（現今帰仁村今泊上原の辺りにあった集落。後に現諸志に移動）の乙樽（王の寵愛を受けた女の名）が，首に掛けたり外したり。（……遅く生まれた子を寵愛する譬え）

4. 《伊舎堂》

伊^い舎^{しゃ}堂^{どう}ぬ 三^{さん}本^{ぽん}榕^{がう}樹^{じゅ} 至^し極^{ごく}珍^{めづ}し物^{もの} 〈スル^{マンザイ}萬^{まん}歳^{さい} 至^し極^{ごく}珍^{めづ}し物^{もの} スル萬^{まん}歳^{さい}ヨ^よー エィサ〉

うりが下^{しも}うとてい 遊^{あそ}び出^で来^きらさや 〈スル萬^{まん}歳^{さい} 遊^{あそ}び出^で来^きらさや スル萬^{まん}歳^{さい}ヨ^よー エィサ〉

（中城村）伊舎堂の三本がじゅまるは，とっても珍しい物。

〈候^{ソロ}万^{まん}歳^{さい} とっても珍しい物。候^{ソロ}万^{まん}歳^{さい}ヨ^よー ソーレサーサー〉

それの下で歌や踊りを（見事に）やり遂げようねえ。〈候^{ソロ}万^{まん}歳^{さい} 歌や踊りをやり遂げようねえ。〜〉

5. 《念仏》

七^{しち}月^{げつ}ゆ八^{はち}月^{げつ}ゆ みちや仏^{ぶつ}ん飾^{かざ}てい

〈エイサー サー エィサー ヒヤウリサーサー スーリサーサー〉

お盆と八月には，土^ち仏^{ぶつ}（あるいは，弥^み陀^だ仏^{ぶつ}の転訛か）をば飾って，

〈エイサー サー エィサー エィソレサーサー ソーレサーサー〉

6. 《前田節》

嘉^か例^{れい}吉^{きち}ぬ遊^{あそ}び 打^{うち}ちはりていからや 〈イマサンニン〉

夜^よぬ明^あきてい 太^{たい}陽^{やう}ぬ上^あがる迄^{まで} 〈ヤティカラスヌ達^{たち} 飲^のマンカネ 飲^のディ遊^{あそ}バナ〉

流^{なが}りゆる水^{みづ}に 桜^{さくら}花^{はな}浮^うきてい 〈同上〉 色^{いろ}清^{きよ}らさあていどう 掬^{すく}てい見^みちやる 〈同上〉

乙^{おつ}羽^は岳^{たけ}登^{のぼ}てい 押^{おし}し下^{くだ}い見^みりば 〈同上〉 謝^{しや}名^なぬ黍^{きびう}芋^もぬ むてい清^{きよ}らさ 〈同上〉

目出度い祝いの遊びに打ち解けたからには、〈イマサンニン〉夜が明けて太陽が上る迄もいい（よ）。

〈ダカラ皆ノ衆、飲マナイカネ。飲ンデ（歌ッたり踊ッたりシテ）遊ボウ〉

流れる水に桜花を浮かべて、色が美しいので掬って見たのだ。……大抵の歌にはまる一般歌詞
乙羽岳（海拔275m）に登って下を眺めると、謝名の砂糖黍や芋が生い茂って美しい。

7. 《稲摺節》

南^{なんぢやうし}鐐^{りう}白^{はく}ない 黄^く金^{がに}軸^{じく}立^たててい 〈稲^い摺^しり 摺^しり 粟^あ選^{せん}り 選^{せん}り イヤササ ウネササ〉
来^や年^いや ゆ^ゆく 優^まてい 雪^{ゆき}ぬ {雪^{ゆき}ぬ} 真^ま米^{ぐみ} 〈稲^い摺^しり 摺^しり 粟^あ選^{せん}り 選^{せん}り イヤササ ウネササ〉

銀の白に黄金の軸（棒杵）を立てて、〈稲ヲ摺レ摺レ、粟ヲ選レ選レ イヤササ ソレササ〉

来年は更に優れて、雪の様な白米。〈稲ヲ摺レ摺レ、粟ヲ選レ選レ イヤササ ソレササ〉

8. 《三村節》

小^う禄^{ろく}豊^{ほう}見^{けん}城^{じょう} 垣^か花^けとう三^み村^{むら} 〈垣^か花^けとう三^み村^{むら}〉三^み村^{むら}ぬ二^に才^{さい}達^{たう}が揃^すとてい 塩^{しほ}焚^たち話^わ
〈雨^あ降^ふラスナヨ 元^{もと}被^かンドー イヤササ ウネササ〉
内^{うち}泊^{どまり} 泊^{どまり}元^{もと}ぬ泊^{どまり}とう三^み村^{むら} 〈元^{もと}ぬ泊^{どまり}とう三^み村^{むら}〉三^み村^{むら}ぬ姐^{あね}小^こ達^{たう}が揃^すとてい 客^{きやく}請^{けい}き話^わ
〈客^{きやく}惚^ぼリスナヨ 元^{もと}被^かンドー イヤササ ウネササ〉

小禄（現那覇市）、豊見城（豊見城市）、垣花（那覇市）と三村。三村の青年達が揃っていて塩焚き話。

〈雨ヲ降ラスナヨ、元手ヲ失イ、損ヲ被ルゾ。〉

内泊（上泊の転訛）、泊、元の泊（以上、那覇市）と三村。三村のあねさん達が揃っていて客請け話。

〈客ニ惚レルナヨ、元手ヲ失イ、損ヲ被ルゾ。〉

……雑踊《三村節》の上句と下句が入り込んでずれた形。本来は、

「小禄 豊見城 垣花とう三村」に対して「三村ぬ姐小達が揃とてい 布織い話 綾マミグナヨ～」

「上泊 泊 元ぬ泊とう三村」に対して「三村ぬ二才達が揃とてい 塩焚ち話 雨降ラスナヨ～」

「辻 仲島とう渡地とう三村」に対して「三村ぬ女郎小達が揃とてい 客待ち〔客請ぎ〕話 ～～」

9. 《白保節》

嘉^か例^{れい}吉^{きち}ぬ遊^{あそ}び 打^うちはりていからや {からや} ヨ
〈寄^きリティ来^く 寄^きラティ来^く 揃^あティ遊^{あそ}バ 遊^{あそ}ビヌ清^{せい}ラサヤ 人^{にん}数^{すう}ヌ真^まワイ 揃^あティ遊^{あそ}バ〉
流^{なが}りゆる水^{みづ}に 桜^{さくら}花^{はな}浮^うきてい {浮^うきてい} ヨ 〈同前〉

目出度い祝いの遊びに打ち解けたからにはヨ、

〈集マッテオイデ、集メテオイデ、揃ッテ歌イ踊ロウ。〉

遊ビノ美シイノハ、人数ガ具ワッテコソ。揃ッテ歌イ踊ロウ。〉

流れる水に桜花を浮かべて、（色が美しいので掬って見たのだ。）……一般歌詞

10. 《健堅辺名地》

健^{けん}堅^{けん}辺^{へん}名^な地^ちや 川^{かわ}原^{はら}隔^かみてい 哀^ありすなよーやー
〈ヒトウヨーテンヨー エイサー サーエイサー ヒヤウリサーサー スーリサーサー〉
吾^わ達^{した}女^め童^{やう} ばーら隔^かみてい 哀^ありすなよーやー
〈ヒトウヨーテンヨー エイサー サーエイサー ヒヤウリサーサー スーリサーサー〉

健堅、辺名地（本部町の高台に隣接する集落）（の人）は、川を隔てて苦勞するなよ。〈囃し〉
私達娘は、（意不詳）隔てて、苦勞するなよ。
……この曲の歌詞は、他地域では多く「～ 哀りすらどーやー」（苦勞するだろうねえ。）

11. 《海やからー》

海やからに惚りてい 岸本さんかに登りてい 明日ぬあきあきや 我暇如何すが
〈海ヤカラー ドンドン スリ ハイスーリ マタ ハイスーリ〉
あんま〔親〕が持たちやる夫や 立派な夫やしが 胸ち持ちちやる夫や 腐り鍋ら鍋 〈同前〉

海の強者に惚れて、岸本さんか（？）に登って、明日の朝は、私の暇をどうするのか。
〈海ノ強者、ロンドン（イギリスカラノ漂着）人。ソーレ エイソーレ マタ エイソーレ〉
……ドンドンは糸満のイギリス人漂着譚に依って訳したが、単なる囃し詞かも知れない。
母さん〔親〕が添わせた夫は、鍛冶屋で尻が垢だらけ。自分で嫁いだ夫は、腐った錆掛屋。

12. 《スーリ東》

スーリ東打ち向かてい 〈スリスーリヌ〉 飛ぶる綾蝶 〈スーリサーサー スラヤサ ハイヤ〉
スーリ東打ち向かてい 〈スリスーリヌ〉 暫し待ち連りら 〈スーリサーサー スラヤサ ハイヤ〉
首里カイ行チュシガ ヤラスミ如何スガ 〈髭小カチミティ スンケスンケ スンケスンケ〉

東に向かて 〈ソレソーレノ〉 飛ぶ綺麗な蝶（よ）、〈ソーレサーサー ソラヤサ ハイヤ〉
東に向かて 〈ソレソーレノ〉 ちょっと待て、一緒に。〈ソーレサーサー ソラヤサ ハイヤ〉
首里ニ行クノダケド、行カセヨウカドウシヨウカ、
〈髭ヲツカンデ、引ッパッテ引ッパッテ、引ッパッテ引ッパッテシマエ。〉

一 二 揚

1. 《海ぬちん法螺》

海ぬちん法螺が 逆なやい立ちば ひさぬ先々 危なさや
〈仕度ヌ悪サヤ 側ナリナーリ サ 浮世ヌ真中 ディサディサディッサイ チナヌヘイヘイ ヘヘイ〉
辻や豌豆豆 仲島や豆腐豆 恋し渡地いふく豆〔だいく豆〕〈同前〉

海の疣海蛸（…細く尖った小さな巻き貝）が逆さになって立てば、足の先が危ないよ。
〈支度ノ悪イノハ、脇へ除ケ除ケ。サ 浮世ノ真中 ディサディサディッサイ〜〉
辻はエンドウ豆、仲島は大豆、恋し渡地（は）いふく豆。
……三ヶ所はかつての那覇の三大遊郭。その遊女を比較したバレ歌。

2. 《イルサースナー》

道端ぬさしやヨー 袖振りば縫る
〈イルサースナー ヨイヨイ エーイスーリ ディヒ姐小添イ添イ〉

道端のヤブジラミの実は、袖を振ると縫りつく。（私もその実になって、あの人に縫りつく。）
〈イルサースナー（？） ヨイヨイ エーイソーレ サァ姐サン一緒ニ〉

3. 《カマヤシナー》

渡久地港に ささ入りてい ささ入りてい 魚小や居らんさ いな戻い

〈サーサ 魚小や居らんさ いな戻い [戻てい]

カマヤシナー スイ カマヤシナー サー カマヤシナー〉

国頭岬^{くんちんさき}から 見ゆる船^み 見ゆる船^み 白帆^{しらふ}や差上^さぎてい 尻向^{しりまう}かてい

〈サーサ 白帆^{しらふ}や差上^さぎてい 尻向^{しりまう}かてい (以下, 同上)〉

国頭船^{くんちんふね}小^こや 傾^{かたむ}ち走^はい 傾^{かたむ}ち走^はい 今帰仁船^{いまきじんふね}小^こぬ 走^はい清^{ちやう}らさ 〈サーサ 今帰仁船^{いまきじんふね}小^こぬ〜〉

十三童^{じゅうさんわらび}に夫^{うとう}持^もち 夫^{うとう}持^もち 如何^いしが眠^{ねん}たら かさぎとさ 〈サーサ 如何^いしが眠^{ねん}たら〜〉

(本部町) 渡久地港に(漁獵用の) 毒草を入れて、毒草を入れて。魚は居ないさ、無駄戻り。

〈サーサ 魚は居ないさ、無駄戻り。カマヤシナイ ソレ カマヤシナイ サー カマヤシナイ〉

国頭岬から見える船、見える船、白帆をば差し上げて後ろに向かって。

……「尻」は、他の地域では一般に「真南」と解される。

国頭船は傾き走り、傾き走り、(でも) 今帰仁船は進むのが美しい。

(数え) 十三歳の子供に夫を持たせ、どうやって寝たら孕んでいる(孕んだ)のか。

……現行では歌われなくなったバレ歌。

4. 〈仲門へい〉

仲門^{なかつら}へい 仲門^{なかつら}へい 遊び^{あし}しが行^いかに 仲門^{なかつら}へい 〈遊び^{あし}しが行^いかに 仲門^{なかつら}兄 ヤリヤリー シーシ〉

遊び^{あし}しが行^いきば 女子^い三人^{なぐみ}に 男^い只^{ただ}我^{わん}一人^{ちゆうい} 〈女三人に 男只我一人 ヤリヤリー シーシ〉

「ねえ仲門、仲門兄さん、野遊び^{もーあし}に行かない? ねえ仲門。」

〈野遊びに行かない? ねえ仲門。ヤレヤレ、シーシ(威勢付けの掛声)〉

「野遊びに行く時にゃ、女三人に男はおれ一人だけ。」〈女三人に男はおれ一人だけ。ヤレヤレ〜〉

5. 〈ダンク節〉

だんく舞習^{まいしやう}ゆんでい 名護^{なぐ}東江^{あがりえ}通^{かゆ}てい ヨンサー 通^{かゆ}る道中^{みちなか}に ちんし切^しり割^わてい

〈スーリヌ ダンクヨー ダンクヨー スリ ヤリクヌ エイサ〉

ちんし割^わらゆかね 頭^ね割^{ちやう}ていしむさ ヨンサー 頭^ね割^{ちやう}ていからや 使^ちいの一^きならんさ 〈同前〉

だんく節を習うと言って名護^{あがりえ}の東江に通って、通う途中で膝を切り割って。

〈ソーレノ ダンコヨー ダンコヨー ソレ ヤレコノ エイサ〉

膝を割るよりかは頭を割る方が辛い。頭を割ったのでは使いのものにはならんさ。

……「ちきの一ならんさ」は「世間^{しよま}おならんさ」(世間並みにはならんさ、の意)の転訛か。

6. 〈谷茶前〉

谷茶前^{たんちやめ}ぬ浜^{はま}にヨー するる小^こが寄^かてい来^きよん [寄^かていていん] どーへーイ

〈するる小^こが寄^かてい来^きよん どーへーイ 谷茶^{タンチャ}ムサムサ ディヒ姐^{ヒヤン}小添^{グー}イ添^ソイ添^ソイ〉

するる小^こやあらぬ 大和^{やまと} {大和} みじゅんどうやんどー [大和みじゅんどうやんていんどー] ヘイ

〈大和みじゅんどうやんていんどー [同前] ヘイ 谷茶^{タンチャ}ムサムサ ディヒ姐^{ヒヤン}小添^{グー}イ添^ソイ添^ソイ〉

「谷茶村(現恩納村谷茶)の前の浜にきびなごが寄って来ている[寄ってる]ってよー。オーイ。」

〈「(繰り返し)」谷茶 ムサムサ、サア姐サント連レダッテ。〉

「きびなごじゃない。大和鯛だよー[だってよー]。オーイ。」〈「(繰り返し)」同前〉

7. 《十七八節》

十七八頃や 夕蘭暮どう待つるヨー 夜ん暮りてい給り 我自由さびら
〈ハラ ドンドンセー 島ユクサンセイ 西トウ東ニ別リティ行カヤー〉
さとうが待ち所 伊佐浜ぬ碑文ヨー 夜ん暮りてい給り 吾自由さびら
〈ハラ ドンドンセー サトウガ心ン 変ワンナヨヤー〉

(数え) 十七八歳頃は、夕暮れ時こそ待つ。夜も暮れて下さい、私は自由になります。

〈ハラ ドンドンセー ムラ (不詳)、西ト東ニ別レテ行コウネ〉

彼の待合場所は (現宜野湾市) 伊佐浜の (橋建設記念の) 碑文。夜も暮れて下さい。

〈ハラ ドンドンセー 彼ノ心ハ変ワルナヨヤー〉

……一般には、「んぞが待ち所 伊佐浜ぬ碑文ヨー んぞが待ち兼にら 我肝あまち」

(彼女の待合場所は伊佐浜の碑文。彼女が待ちかねているだろうか、僕の心も揺れて。)

8. 《ヨー加那ヨー》

ヨー加那ヨー 根引前になりば ヨー加那ヨー
〈心許なさぬ ヨー加那ヨー スリ イヤサヌサ ササ イヤサヌサ〉
ヨー加那ヨー 吾がやんばさしが ヨー加那ヨー
〈あんま主が持たち ヨー加那ヨー スリ イヤサヌサ ササ イヤサヌサ〉

ヨー愛シイ人ヨー 婚礼前になると ヨー愛シイ人ヨー

〈不安になる ヨー愛シイ人ヨー ソレ イヤサノサ ササ イヤサノサ〉

ヨー愛シイ人ヨー 私が断ったのに ヨー愛シイ人ヨー

〈母と父が嫁がせて ヨー愛シイ人ヨー ソレ イヤサノサ ササ イヤサノサ〉

9. 《赤山》

奥山ぬ牡丹ヨー 誰頼てい咲ちやが ヤリクヌ 人ぬ通わちやる 中ぬあさぎ ハラユイユイ
〈ヤリクヤリクヌ 忍ディ語ラタル 中ヌアサギ ハラユイユイ〉
流りゆる水にヨー 桜花浮きてい ヤリクヌ 色清らさあていどう 掬てい見ちやる ハラユイユイ 〈同前〉

奥山の牡丹 (は)、誰を頼って咲いたか。～……伊良波伊吉作の歌劇《奥山の牡丹》(1914 (大正3) 年)
ラストの山戸の運ねの一節「誰頼てい咲ちゅが 奥山ぬ牡丹 人ぬ通わさん 所なかい」

(誰を頼んで咲くか 奥山の牡丹、人の通わせない所に) が変容した歌詞。

～ハラヨイヨイ 〈ヤレコ ヤレコノ 忍ンデ語り合ツタ中ノ離レ家。ハラヨイヨイ〉

流れる水に桜花を浮かべて、色が美しいので掬って見たのだ。……一般歌詞

10. 《ヨー愛シー》

衣どう晒するい 布どう晒するい 〈水や吾が汲むさ〉 うたていや居らに 〈ヨー愛シー 我焦ガラチ〉
流りゆる水に 桜花浮きてい 〈色清らさあていどう〉 掬てい見ちやる 〈ヨー愛シー 我焦ガラチ〉

衣こそを晒すか、布こそを晒すか。水は私が汲むよ、疲れてはいないか。……地謡の解説による訳

〈ヨー 愛シイ人、私ヲ焦ガラセテ〉

流れる水に桜花を浮かべて、色が美しいので掬って見たのだ。……一般歌詞

11. 《サヨサー（世願節）》

サヨサー しかぬ川ぬ涌や 石被てい湧ちゆさ
 〈謝名ぬ女童ぬ ウネ〉御笑清らさ〈ウネ 近寄ティ来ヨ 同士部又達〉
 サヨサー 越地川ぬ涌や 砂被てい湧ちゆさ
 〈越地女童ぬ ウネ〉がまく清らさ〈ウネ 近寄ティ来ヨ 同士部又達〉

サヨサー シカー（謝名の泉の名）の泉の湧き水は、石を持ち上げながら湧き上がるよ。

〈謝名の娘の ソレ〉笑顔（の口元）が美しい。〈ソレ 近寄ッて来イヨ、仲間達〉

サヨサー 越地（謝名の隣集落）泉の湧き水は、（海の）砂を持ち上げながら湧き上がるよ。

〈越地娘の ソレ〉腰（のくびれ）が美しい。〈ソレ 近寄ッて来イヨ、仲間達〉

12. 《デンスナー》

嘉例吉ぬ遊び 打ちはりていからや イヤササ 夜ぬ明きてい太陽や 上がる迄ん
 〈イーマ デンスナー ヌ ヤリヤリヤリ〉
 流りゆる水に 桜花浮きてい イヤササ 色清らさあていどう 掬てい見ちやる〈同前〉
 天ぬ群星や 読みば読まりしが イヤササ 親ぬ寄し言や 読みやならん〈同前〉

目出度い祝いの遊びに打ち解けたからには、イヤササ 夜が明けて太陽が上る迄もいい（よ）。

〈イーマ デンスナー（？） ノ ヤレヤレヤレ〉

流れる水に桜花を浮かべて、色が美しいので掬って見たのだ。……一般歌詞

天の沢山の星は数えれば数えられるが、親の教えは数えることはできない。……教訓歌

4. 謝名エイサーの楽譜

楽譜は、前述の収集資料のうち録音の4を中心に、他の資料も加えて検討しながら作成した。

凡 例

- ・本調子、一二揚とも1オクターヴ高く高音部譜表に記した。
- ・上下になった音符に数字が付してある場合は該当番数での歌い方を示し、付していない場合はその時々々のさまざまな歌い方を示した。
- ・（ ）内の音は頻度が高くないものである。
- ・主楽譜の上の小さい楽譜は、違いが大きい歌い方を示した。
- ・歌詞欄の矢印は、その部分が拍ごと省略されることを示した。
- ・歌詞欄の〈 〉は、踊り手の歌唱部分である。
- ・楽譜中の ♪ は ♪ に近い。
- ・記譜上は拍の頭から始まる部分も半拍追い込まれて歌われることがある。こうした歌い方が比較的多い場合は、▲を音符の下に記して示した。
- ・踊り手の囃しの後にはたいてい「イヤササ」「アネサッサイ ハ ハ」等の掛声がつくが、楽譜では省略した。ただし、囃しとは関係なく必ず掛けられる掛声は記載した。
- ・採譜は、小林公江が行い、小林幸男が校閲した。

本調子

三線の前奏



* 繰り返し記号のある部分は適宜繰り返しされる。

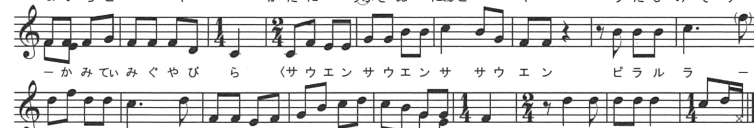
1 前囃し〜二合小



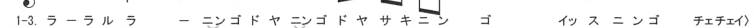
ゆにげーさびらあんまーたい(スリチン)トウンテン
なまりていなまりていちゃーずがやー(スリチン)トウンテン



1. くまぬーはんしーめやーちむぬーゆーたみさぬ
2. いちたーみせらーにんぬーやーうたみそり
3. いちやーかたにーうがきぬーにんぬーやーうたみそり



ーかみていみぐやびら(サウエンサウエンササウエン)ピラルラー



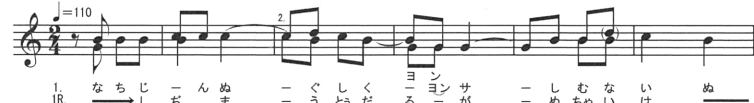
1-3. ラーラルラーニンゴドヤニンゴドヤサキニンゴ イッスニンゴ チェエイ



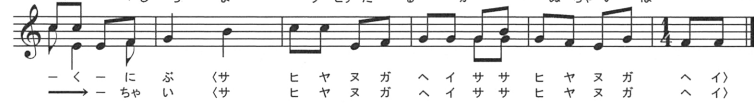
1. あがりんじょぬーぎぎーちーゆだむーちぬーちゆらーさ
2. わしたみーやーらびぬーどむちーぐわぬーちゆらーさ

1-2. (テンヨーテンヨシタリクテンササハーリョーイヌーユイヤナ)

3 今帰仁ぬ城



1. なちじーんぬぬーぐしくだーヨンサーしむないはぬ
1R. なちじーんぬぬーぐしくだーヨンサーしむないはぬ

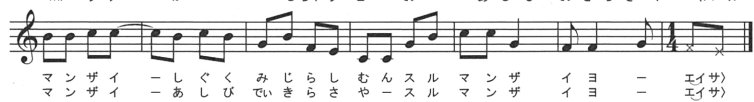


ーくーにふ(サ)ヒヤヌガヘイササヒヤヌガヘイ
ーちや(サ)ヒヤヌガヘイササヒヤヌガヘイ

4 伊舎堂



1. いさどーぬーさんぶんがちまるーしぐくみじらしむん(スル
1R. うりーがーしちゃうどーていーあしびでいきらさやー(スル



マンザイーしぐくみじらしむんスルマンザイヨーエイサ
マンザイーあしびでいきらさやースルマンザイヨーエイサ

5 念仏

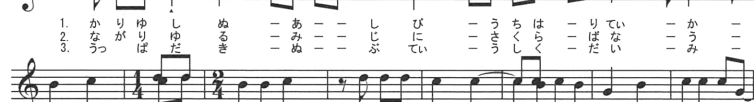


しちぐわーちゆーはちーぐわちーゆーみちやぶとうーけんーかー

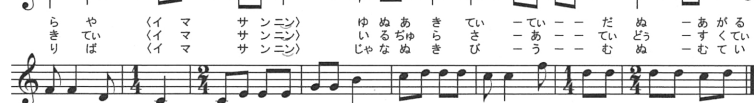


ざてい(エイサーサエイサヒヤウリササスリササ)

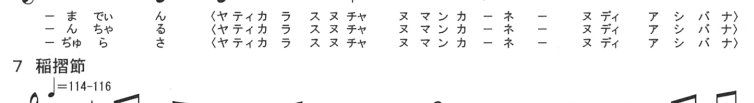
6 前田節



1. かなりゆーしぬぬーあーしーびーうちーはーりていーかうー
2. なつーりばぬぬーみぬーぶにていーまきしーばないーみぬー
3. かなりゆーしぬぬーあーしーびーうちーはーりていーまきしーばないーみぬー

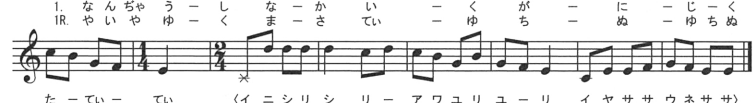


らきりやてい(イママサニン)ゆるぬあきらていーだぬぬーあがる
りば(イママサニン)じゃなぬきさびーあぬぬーすくいてい

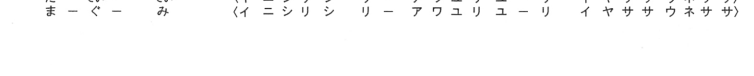


ーまていんる(ヤティカラスヌチャヌマンカーネーヌディアシバナ)
ーんちやんる(ヤティカラスヌチャヌマンカーネーヌディアシバナ)

7 稲摺節



1. なんぢやうーしくなーかいてーくがーにーじーく
1R. やいやゆーしくなまーさていーゆがーぬーゆちぬ



たていーてい(イニシリシリーアウユリユーリイヤササウネササ)
まーぐーみ(イニシリシリーアウユリユーリイヤササウネササ)

8 三村節

♭=112-114

1. うるく - とみ - ぐし - く - ー かちぬ は - なとみ - む - ら
 2. うちど - まい - どま - い - むらぬ どうまいとみ - む - ら

(かちぬ は - なとみ - む - ら) みむらぬにせたが すり とてい -
 (むらぬ どうまいとみ - む - ら) みむらぬ あんぐわが すり とてい -

ますたちば - な しし <アミフラスナヨ - ムトカ ンジュンド イヤササ ウネササ>
 ちやくきば - な しし <チャクフリスナヨ - ムトカ ンジュンド イヤササ ウネササ>

9 自保節

♭ = 114-116

1. か り 二 ゆ 二 し 二 め 二 あ 二 し 二 び
2. な が 二 り 二 ゆ 二 る 二 み 二 じ 二 に 二

う さ 二 ち 二 は 二 り 二 二 て い 二 か 二 二 ら や 二 か 二 二 ら 二
二 二 や い 二 ヨ ユ リ 二 ティ ク 二 ユ ラ ティ ク 二 ス ル ティ ア 二 シ

1-2. バ ア シ ビ ス テュ ラ サ ヤ ー ニ ュ ス ナ ワ イ ー ス ル ティ ア ー シ ー バ

10 健堅辺名地

● 114

1. きんきん ひなぢやー かーら ひぢやみていー あわりすなよ や (ヒトウヨ
 2. わした みやらびー ーばら ひぢやみていー あわりすなよ や (ヒトウヨ

1-2 テンヨ エイサー サ エイサ ヒヤウリサ サ スリサ サ)

11 海やからー

$\text{♩} = 116$

1. う み や か ら に ー ふ り て い ー き し む だう さ ん か に ー ぬ ぶ
2. う や ぬ む た ち ゃ う と う や ー り ー つ ば な う ー と う ー や ー し

(エイサ エイサ エイサ)

て い が あ ー ち ゃ ぬ あ ー ち ゃ ぬ あ ー ち ゃ ぬ あ ー ち ゃ ぬ あ ー ち ゃ ぬ あ ー ち ゃ ぬ あ ー ち ゃ ぬ
あ ー ち ゃ ぬ あ ー ち ゃ ぬ あ ー ち ゃ ぬ あ ー ち ゃ ぬ あ ー ち ゃ ぬ あ ー ち ゃ ぬ あ ー ち ゃ ぬ

1-2 ♪ ウ ミ ヤ カ ラ ド ン ド ー ン ス リ ハ イ ス ー リ ー マ タ ハ イ ス ー リ)

12 スーリ東

♭ = 114-116

スリ リ あ が リ - う ニ ち ニ ん - か て い - (ス リ ス -
ス リ あ が リ - う ニ ち ニ ん - か て い - (ス リ ス -
リ ヌ) と う ぶ る あ や は ベ - る (ス リ サ サ - ス ラ ヤ サ - ハイ ヤ
リ ヌ) し ば し ま ち り - ら (ス リ サ サ - ス ラ ヤ サ - ハイ ヤ
Coda
ス イ カ イ イ チ ャ シ ガ ヤ ラ ス ミ - チ ャ ス ガ (ヒ チ グウ カ チ ミ ティ ス ク ス ン ケ ス ン ケ ス ン ケ

一二揚

三線の前奏

$$= 100 \rightarrow 104$$

このフレーズが適宜繰り返される。

1 海ぬ釣法螺

● 112-114

1. う み ぬ ちんぼら が ー さ か な ー や い ー た ー ち ぼ ひ き ぬ
2. ち ぢ ち いんどま み ー な か な し ー ま や ー と ー ふ ま び く い し

さ ち ん ち ー あ ぶ な さ や 〈シタ ク ヌ ワツ サ ヤ ー スパナリ ナ ー リ ー サ
わ た ん ち ー い ふ く ま み 〈シタ ク ヌ ワツ サ ヤ ー スパナリ ナ ー リ ー サ

1-2. ウ チ ヌ マ ン ナ カ ディ サ ディ サ ディ サ イ ー チ ナ ヌ ヘ イ ヘ イ ヘ イ

2 イルサスナー

J=114

みち ば - た め - - さ し や - ヨ - - す で い ふ - り ば - し

が - る (イ ル サ ス ナ - ヨ イ ヨ イ エ イ ス - リ デ ヒ ヤ ン グ ソ イ ソ イ)

3 カマヤシナー

J=112-114

1. と う ぐ ち み な と う に さ さ い り て い - - さ さ い り て い - - い ち ゅ ん が う ら ん さ
2. く ん ち ゃ ん さ ち か ら み ゆ る ふ - に - - み ゆ る ふ に - - し ら ふ や さ さ ぎ て い
3. く ん ち ゃ ん ぶ に ぐ わ や は た ん ち - ば い - は た ん ち ば い - - な ち じ ん ぶ に ぐ わ め

い な む だ う - い (サ - サ い ち ゅ ん が う ら ん さ - い な - む だ う - て い
ま え む か - て い (サ - サ し ら ふ や さ さ ぎ て い - ま え - む か - て い
は い ち ゅ ん - さ (サ - サ な ち じ ん ぶ に ぐ わ め - は い - ち ゅ ん - さ

1-3. - カ - マ - ヤ シ ナ - ス イ カ マ ヤ シ ナ - サ - カ マ ヤ シ ナ -

4 仲門へい

J=112-114

1. な か じ ゅ - へ い - - な か じ ゅ - へ い あ し び - し が - - い か に な か じ ゅ -
1R あ し び - し が - - い - - き ば い な ぐ み - つ ち ゃ い に - い き が た だ わ ん

へ い (あ し び し - が - - い か に な か じ ゅ - へ い ヤ リ ヤ リ - シ - シ)
ち ゅ い (い な ぐ み - つ ち ゃ い に - い き が た だ わ ん ち ゅ い ヤ リ ヤ リ - シ - シ)

5 ダンク節

J=114

1. だ ん ぐ も ら な ら ち ゅ ん - ね な ぐ あ る - が り - か ゆ て い
2. ち ゅ ん - わ ら ち ゅ ん - か - ね な ぐ あ る - が り - し む さ

ヨ ン サ - か ゆ る - み ち な か - に - ち ん し き り わ て い
ヨ ン サ - ち ぶ る - わ て い な - ら - や ち ぎ の - な ら ん さ

1-2. (ス - リ - ヌ ダ ン ク ヨ ダ ン ク ヨ ス リ ヤ リ ク ヌ エ イ サ -)

6 谷茶前

J=114-116

1. た ん ち ゃ - め め - - は ま に - ヨ す - る - る - ぐ わ - が
2. す る - る - ぐ わ - - あ ら め - ヨ *2 や - ま と う - み じ ゅ ん ど う

ゆ て い ん ど - へ - - イ (す - る - る - ぐ わ - が
や て い ん ど - へ - - イ (や - ま と う - み じ ゅ ん ど う

ゆ て い ち ゅ ん ど - へ - - イ タ ン チ ャ ム サ ム サ デ ヒ ヤ ン グ ソ イ ソ イ
や て い ん ど - へ - - イ タ ン チ ャ ム サ ム サ デ ヒ ヤ ン グ ソ イ ソ イ

*1 この部分は1拍長くなることもある。
*2 2004年の録音では「やまとうみじゅん」は「みじゅんぐわ」となる場合もある。
また、1997年の録音では「やまとうやまとうみじゅんどうやんどーへい」と歌われているので、様々な歌い方があると思われる。

7 十七八節

J=116

1. じ ゅ し ち は ち ぐ る - や - - ゆ ま ん ぐ い だ う - ま ち ゅ る ヨ -
2. さ と う が ま ち だ う - る - - い さ は ま め - ひ む ん ヨ -

- ゆ ん く り - て い た ぼ - り わ じ ゆ さ び ら (ハ ラ ド ン ド ン セ
- ゆ ん く り - て い た ぼ - り わ じ ゆ さ び ら (ハ ラ ド ン ド ン セ

シ マ ユ ク カ ク セ イ 2 ニ シ ャ ヒ ガ シ ニ ワ カ リ テ イ カ ヤ)
サ ツ ウ ガ ク ル ン カ ワ シ ン ナ ヨ - ヤ -

8 ヨー加那ヨー

J=114-116

1. ヨ カ ナ - ヨ に わ び ち - め - - に ば - な - り - ば
2. ヨ カ ナ - ヨ に が や - ん - - に ば - な - り - ば

ヨ カ ナ - ヨ (く - る - む - と う - - な - さ - め
ヨ カ ナ - ヨ (あ - ん ま - す - が - - む - た - ち

ヨ カ ナ ヨ ス リ イ ヤ サ ヌ サ サ サ イ ヤ サ ヌ サ)

9 赤山

第2楽章 ♯F#m =116

うが　　り　　ま　　ぬ　　ぶ　　た　　に　　ヨ　　た　　く　　た　　ゆ　　て
な　　が　　い　　ゆ　　み　　じ　　に　　ヨ　　さ　　くら　　ば　　い　　な

さ　　ち　　や　　リ　　ク　　ヌ　　ひ　　ど　　ぬ　　か　　ゆ　　わ　　ち　　る
う　　き　　え　　ヤ　　リ　　ク　　ヌ　　い　　ろ　　ぢ　　ら　　さ　　あ　　て　　い　　ど　　ろ

な　　ぬ　　あ　　さ　　ぎ　　ハ　　ラ　　ユ　　イ　　ユ　　イ　　ヤ　　リ　　ク　　ヤ　　リ　　ク　　ヌ　　シ　　ヌ　　デ
す　　く　　て　　い　　ん　　ち　　ゃ　　る　　ハ　　ラ　　ユ　　イ　　ユ　　イ　　(ヤ　　リ　　ク　　ヤ　　リ　　ク　　ヌ　　ー　　シ　　ヌ　　デ

1-2　　カ　　ー　　タ　　ー　　ラ　　ー　　タ　　ー　　ル　　ー　　ナ　　カ　　ヌ　　ー　　ア　　サ　　ギ　　ハ　　ラ　　ユ　　イ　　ユ　　イ　　)

10 ヨー愛シー

♩ = 114-116

1. ち ん ど う さ ら に す る に い に め さ め く に に ど う
2. な が と り ゆ ら に み る に に に さ め く に に ど う

さ ら に す に る い て い 〈み じ ゃ や ら 一 が く く ー
ば な に う き て い 〈い る ち ゆ わ 一 さ あ て い ー ー
う た て い や ー う ん ら に る 一 〈ヨ カ ナ シ 一 ワ ン ク ガ ガ
す ー く て い ー ん ち ゃ 一 〈ヨ カ ナ シ 一 ワ ン ク ガ ガ
う た て い や ー う ん ら に る 一 〈ヨ カ ナ シ 一 ワ ン ク ガ ガ
す ー く て い ー ん ち ゃ 一 〈ヨ カ ナ シ 一 ワ ン ク ガ ガ

11 サヨサー(世願節)

♩=114

1. サ ヨ サ ニ し か ぬ か ぬ わ ニ く ニ や い し か
2. サ ヨ サ ニ く い ち が ぬ わ ニ く ニ や い し な か
3. み て い わ 一 ち ゆ ニ さ さ (じやな ぬ み や ら 一 び ぬ ウネ)
み て い わ 一 ち ゆ ニ さ さ (くい ち ぬ み や ら 一 び ぬ ウネ)

み わ れ く 一 ち ゆ ら さ さ (ウネ チ カ ユ ティ ク ヨ ニ ドウ シ ビ ス チヤ)
み ま く 一 ち ゆ ら さ さ (ウネ チ カ ユ ティ ク ヨ ニ ドウ シ ビ ス チヤ)

12 デンスナー

[illegible]

*1 第2節、第3節は、踊り手の囃しが終わるのを待たず、この部分で開始することもある。

*2 第3節のあとには三線の後奏が4拍続く。

謝辞

エイサーや行事について多くのことをお教え下さいました米須清敬氏、我那覇隆正氏はじめ、快く録音や行事を取材させて下さいました謝名区長（2004年当時）松本利夫氏、謝名青年会や区民の皆様にご心より御礼申し上げます。

文献

今帰仁村謝名区編集委員会編

1987『じゃな誌』今帰仁村謝名公民館

半田一郎編著

1999『琉球語辞典』大学書林

註

1. 米須清敬氏は16, 7才の頃青年団に入り、エイサーの練習で公民館に集まったが、警官が来て娯楽的なものを止めたので練習はできず、以後エイサーは中断したとのことである。
2. エイサーを行う場所は区長や会計が先触れとして廻って決めていた。なお、我那覇氏の後にはエイサー廻りを旧暦7月15日に行ったこともあるようである。
3. 現在も公民館の庭で二重円になることもあるが、たいていは同方向に廻っている。
4. 『じゃな誌』（1987）には、既にエイサー廻りは過去のこととして書かれており、櫓を建てて区民で行う催しが「家庭の年中行事」として取り上げられている。
5. 今帰仁村の他集落でもかつては同様の曲数が歌い踊られていたが、現在、多くの集落では、途絶した曲も多い。